

ベトナム少数民族居住地における5週間のマラリア累積罹患リスク

中澤 秀介¹ LE DUC DAO² NGUYEN VAN TUAN² NGUYEN DUC GIANG²
TRUONG VAN HANH² 砂原 俊彦¹ 山本 太郎¹ 門司 和彦¹長崎大学 熱帯医学研究所 感染細胞修飾機構¹
ベトナム国立マラリア学・寄生虫学・昆虫学研究所²

ベトナム南部ピンフック省のマラリア感染の激しい少数民族居住地域において、保護者の書面に拠る調査参加の同意を得た上で、小学生を対象にマラリアの顕微鏡検査を6週にわたって毎週行った。スライド陽性者は、ベトナムの治療方針に従って、熱帯熱マラリア陽性者にはアルテスネート、三日熱マラリア陽性者にはクロロキンとプリマキン、その他の陽性者には熱帯熱マラリアに準拠して薬剤を調査者の観察下で内服させた。調査対象者のうち83名（男児44名、女児39名、平均年齢8.7歳）が6週にわたる採血のすべてに参加した。6回の検査で顕微鏡で検出できた原虫は熱帯熱マラリア原虫Pf、三日熱マラリア原虫Pv、四日熱マラリア原虫Pmで、卵型マラリア原虫は検出されなかった。調査初日（第0週）にマラリア原虫陽性者は30名（36.1%）で、Pf単独21名（25.3%）、Pv単独7名（8.4%）、PfとPvの混合感染1名、PfとPmの混合感染1名であった。次の週（第1週）には治療した30名はすべてスライド陰性であり、第0週に陰性だった者53名のうち7名（13.2%）が陽性となった。第6週までの5週間の累積罹患リスク割合はマラリア全体で71.1%、Pfで54.3%、Pvで32.2%であった。第0週目にスライド陰性だった者だけの第1週から5週まで4週間の累積罹患リスク割合はそれぞれ54.8%、37.8%、25.0%であった。脾腫は第0週の陽性者の67%、陰性者の45%で認められた。37.5 以上の体温があった者は第0週で47%、その後は5-14%となった。体温はPv陽性者で高い傾向が見られ、Pf陽性では陰性と差がなかった。熱帯熱マラリア原虫に対する特異抗体は陽性者、陰性者いずれも高値であった。Pf治療後n週目にPf陽性になる割合は1週目で2.0%、2週目で4.4%、3週目で12.5%、4週目で5.9%、5週目で36.4%であった。治療後5週間の累積罹患リスク割合は50.9%、4週間では22.9%であった。一方Pvでは治療後5週間までに再度Pvが陽性になった者はいなかった。

Accumulated infection risks of malaria during five weeks in a living area of an ethnic minority

SHUSUKE NAKAZAWA

Department of Protozoology, Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University, Nagasaki, Japan